洛外閑話 第40回

淳豊堂　吉田 昭二

「對泉家　魁　文楼田元成」
――上袋は消える――

最近、二組の『對泉譜』を拝見する機会があり、その中の一冊に、面白いものが挟み込まれていましたので、この機会に、その著者と本自体とを紹介させていただきます。

『對泉譜』は化政期に前集と後集の二冊が発行された書籍です（**写真①**）。

ＮＨＫの大河ドラマ「べらぼう」の主要な舞台にもなり、登場人物の一人でもあった江戸・新吉原の妓楼「大文字楼」の二代目当主である村田市兵衛（元成）と、載陽堂・大邨成富との共著として出版された中国北宋期貨幣の専門分類譜でした。

冗長になりますが少し説明を加えますと、北宋期の貨幣には、歴代皇帝のもとで年号が制定されますと、多くの場合、その年号が記されるか、または国号の「宋」を配した貨幣が鋳造されたのです。例えば第四代仁宗は一〇二三年に天聖と改元して、その年号を表記した「天聖元寶」を鋳造していますから、これを「記年錢」と呼びます。また第八代徽宗は、一一〇一年に建中靖国と改元して〝聖宋元寶〟を発行し、これには「宋」の文字が入れられていますから「国号錢」と呼ぶのです。

このように貨幣を鋳造する錢監（造幣局に当たります）では、貨幣の錢面の「〇〇元寶」「〇〇通寶」の「〇〇」に当たる部分に、記年なり国号を配したのです。そして同時期に鋳造される貨幣は、各錢監独自の技術や製法、用いる原材料の銅、そして配合される錫、鉛や少量の不純物、鋳砂などによって独自な仕上がりとなり、何よりも、そこに記されている「錢文」は同じではなく、その錢文には「楷書」「隷書」「篆書」などで書かれています。

宋錢には「楷書」と「篆書」、「隷書」と「篆書」という組み合わせで鋳造されたものらしいと気付いた安田而唐が、寛政年間（一七八九～）ころの難波（現、大阪）に現れたのです。

而唐はその組み合わせには約束があり、錢の外縁の廣狭、内穿の大小、郭の細濶に谷地の深浅、凹凸など錢躰両面には同じ特徴があり、何よりも、文字自体が錢面上に位置する場所の変化など、多角的に貨幣を眺めますと同じ製作であることに思い至りました。

宋錢の大部分が「真・篆」の組み合わせで造られたと考えた彼は、「楷書」「隷書」を「真書類」とし、「篆書」を「篆書類」と看て、その「真・篆」は同一錢監内で同時に鋳造され、それを「**対錢**」と名付けて、その組み合わせを考え、それぞれに名前を付けて分類し、その存在数にまで想いを巡らせて選択に取り組んだのです。

ここで注目すべきは、宋錢に〝**固有名詞**〟を与え、存在数の多寡を位付けとして〝**数字**〟で評価し、それを分類の要諦としたところです（**写真②**）。

この発想は、日本の先人が編み出した独創的な着想であり、宋錢に限

写真①　『對泉譜』　前集・後集

当時とすれば対錢分類の最高傑作として、自他ともに許す存在だったでしょうが、その座を『符合泉志』に奪われます。

彫り込まれている錢図は、拓本を用いて真に迫ろうとしてはいますが、『符合泉志』の尾張京町「彫工　中村屋次助」との力量の差は歴然です。